

一人の女の子をわかってる。月水金は彼がベッドで彼女と眠り、僕は台所に毛布を敷いて眠る。火木土はその逆だ。そして日曜日には彼女は横浜の実家に帰り、僕とシェービング・クリムのふりをしたスコットランドの王子は二人で一晩、トランプの51をやる。そして夜が明けるところに僕は髭を剃って眠る。

⑩

シェービング・クリーム
shaving cream

シェービング・クリームにはどこかしらスコットランドの王子みたいな趣きがある。それが何かの都合でシェービング・クリムのふりをしているのだ。きつと王位継承かなにかに關係があるんだと思う。時々僕がジュリアン・ブリームのリポートのレコードをかけていたりすると「あ、君、それいいね、もう少しザオリュームあげてくれないかな」などと言ったりもする。

だろ？というのが僕の推測である。

シーズン・オフ
season off

我々はシーズン・オフのリゾート・ホテルに泊っていた。道路の雪が溶けはじめて何もかもがぐしゃぐしゃになるといちはん嫌な季節だ。

広いダイニング・ルームには我々の他に客の姿はなかった。実のところ我々以外にホテルの宿泊客はひとりもいなかった。ダイニング・ルームの左半分は電気を消されてまっ暗になっていた。そこにあくびをしていた。グアイターは三人いたが、一人ずつ後ろをむいてかわりば我々はそんな中で、ずき料理を食べていた。まるで世界の終末が近づいているような気分だった。

「……ということなんだ」と僕はロトル・パンをちぎりながらテラブルゴしに彼女に話しかけた。「どう思う？」

彼女は黙って十秒ばかり僕の顔を見ていた。

「ごめんなさい。別のこと考えてたものだから」

まあいや。そして僕は不親切な公認会計士みたいな味のあるパンを口の中に放り込んだ。

シーズン・オフのリゾート・ホテルくらい素敵な場所はない。そこにいと、まるで来年のシーズン・オフを、ついで買っているような気がするのだ。

⑩